

## 2.2.インターネット班概要

土居 浩

今期のインターネット班では、昨年度の成果を踏まえ、各自の課題を遂行し、今後の展望を示した。

橋本雄太報告「結婚式における IT 活用の現状と趨勢」は、自身の経験を具体的事例報告とした昨年度報告「コロナ禍における結婚式の開催と情報システムの利用」を、今年度はいわば俯瞰して概観を試みる。橋本報告では、結婚式における IT の活用形態として、オンライン結婚式・オンラインでの事前打ち合わせ・オンラインご祝儀・VR 結婚式が取り上げられ、検討される。橋本によれば、コロナ禍を経てもごく少数の普及に留まっている理由として、多くの人にとって「結婚式の一回性」や「対面での親密な人間関係を重視する」といった価値観が「まだ普遍的だから」と指摘する一方で、「メタバースのようにオンライン空間上での人間関係が今後一般化し、人々の対人関係についての価値観が変容した際に、結婚式の形態が大きく変化する可能性も否定できない」として、今はまだ特異な事例である VR 結婚式への注視をうながす。

儀礼実践のオンライン化について、田中大介報告「オンライン葬儀の需要と可能性：情報化による職能実践と儀礼実践の変容（その 2）」は、橋本報告とは異なる角度から検討する。株式会社レクスト（本社は名古屋市）と、株式会社京阪互助センター（本社は大阪市）へのインタビュー調査を踏まえ田中は、オンライン葬儀について、メディアの論調である「ニーズの高まり」や「選択肢の一つとして定着しそうだ」とは乖離している現状を指摘する。加えて田中は、オンライン葬儀が低調である現状について、技術的な能力あるいは設備環境などのリソース不足に起因するのではなく（むしろそれらはほぼ十全に備わっているにも関わらず）「消費者との差異化が果たされていない＝利潤を創出できるサービスとして提供することが難しい」という事実を発見している。田中はこの事実を、インタビュー調査の過程で冠婚部門と対比するエピソードから見出しており、その点で橋本報告との異同が興味深い。

オンライン葬儀に対してオンライン墓参・オンラインメモリアルについては、瓜生大輔報告「地方都市の納骨堂に見られる新たなデジタル情報技術導入手法」ほか 3 名が検討している。東京（港区・台東区）・横浜市・呉市・広島市・鹿児島市・札幌市・神戸市・仙台市の納骨堂を訪問調査した報告と、台湾・台北市の最先端事情についてのヒアリング報告を踏まえた瓜生の考察によれば、東京や名古屋など先行的に搬送式納骨堂が広まった大都市圏での「頭打ち感」に比べ、地方都市では「独自進化」とでも呼ぶべき展開が見られるという。中でも瓜生が注目するのは、搬送式とは異なり「遺骨は定位置に保管したまま、デジタル参拝ブースのみを設置するモデル」である。瓜生の考察によるならば、この延長上には、遺骨の保存・継承を重視しない＝遺骨を処分する葬法があり、よりデジタル技術との親和性が高い。今回の報告で瓜生が特に「自然葬への代替手段としてオンラインメモリアルの利用推進」を企図する台北市の事例を取り上げたのも、日本社会における次世代の納骨堂の可能性を示唆するとみなすからである。

小谷みどり報告「仮想空間での墓の可能性」も台北市のオンラインメモリアルサイトに注目している。小谷報告では、アンケート調査やヒアリング調査から「ポスト・コロナの時代になっても、オンラインでの参列に一定の需要があるとはいえない」と指摘がなされる一方で、コロナ禍を契機として、墓参しない人の増加・墓参頻度の低下・親族の立ち会いのない火葬件数の急増など、葬送の変容が示唆される。小谷によれば、変容する可能性のひとつは「墓のバーチャル化」である。小谷は、アメリカ合衆国でのコンポスト葬と、台北で推進される「緑色殯葬」（樹葬、花葬、海葬）を検討することで、両地域ともに共通して土葬から火葬への転換が進み、墓を作らない選択肢が広がっていることを指摘して

いる。

宮澤安紀報告「日本におけるオンラインメモリアルサイトの可能性について」では、英語圏におけるオンラインメモリアルサイトの研究事例を踏まえつつ、日本におけるオンラインメモリアルサイトの特徴が検討され、その可能性が考察される。宮澤によれば、西洋社会の文脈においてオンラインメモリアルサイトは、死別の悲嘆をプライベートに閉じ込めることなく共有を可能にし、そして死者と生者の「継続する絆」の媒介を可能にした。一方でオンラインメモリアルサイトが日本でそれほど浸透していないことから、日本の文化的傾向として、死者と生者の「継続する絆」を媒介する装置としての墓や仏壇の存在が指摘される。しかし居住空間に仏壇を置かない家庭が増えていることなどから、「今後仏壇に親しみを持たず、かつオンライン上でのコミュニケーションによりリアルさを感じる世代が死を迎える時代になれば、日本でもオンライン上での追悼という行為がさらに一般化していく可能性がある」と指摘する。この宮澤の指摘は、奇しくもオンライン結婚式について検討した橋本報告の指摘と響き合う。

以上、今期のインターネット班では、各自の課題をさらに深めたことで、相互の関連性について絞り込んだ検討を展望できる水準に達した。中でも、遺骨に執着しないオンラインメモリアルサイトの可能性と、その背景としてのオンライン空間における人間関係の将来展望については、複数の班員が指摘している。最終年度の総括へ向けて、調査研究のさらなる進展はもちろん、班員相互の意見交換が期待されるところである。